



Title	ルポルタージュの時代：後期モダニズムの展開と衰退
Author(s)	山田，雄三
Citation	Osaka Literary Review. 2024, 62, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94929
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ルポルタージュの時代

——後期モダニズムの展開と衰退——

山田 雄三

プライベート化する現代社会

社会的には、近代の産業都市の生活における二つの傾向、一見すると逆説的だが、相互に深く結びついた二つの傾向が、この〔開発の〕複合体を特徴づけていた。すなわち、一方では、社会の流動性、もう一方では、ますます自己充足性を深めつつあるかにみえた家庭の存在である。鉄道と街灯に代表される公的なテクノロジーの時代に替わって、適切な呼び名がいまだに見出せないようなテクノロジーの時代がおとずれていたのだ。そのテクノロジーは、流動的であると同時に家庭中心の生活様式に奉仕するようなものであり、いわば流動的なプライベート化の様態をもつ。¹

20世紀のはじめに誕生するルポルタージュという形式は、まさしくこの「流動的なプライベート現象」のなかから生まれた。この時期の作家はフットワーク軽く、あちこちを訪い、気軽に土地の人とふれあい、その経験を活字にした。そう述べたのもウィリアムズである。² 当時の作家たちの軽薄な関係づくりを皮肉った発言ではあるが、言い得て妙である。ここでも移動のテクノロジー、すなわち自動車の普及が大きな変化をもたらす。自動車というテクノロジーは、パブリックな世界の目眩く動静を車窓から眺めながら、それでも車内という閉じたプライベートな空間を維持する装置として現代人に奉仕するようになる。ルポ作家の場合もこのテクノロジーの恩恵を受けて、車窓から景色を眺め、ときに車を停めて土地の人

びとと語らいつつ、車内のプライベートな空間で心に去来することを眩くという手法を取るようになった。

ふたつの大戦間期のイギリスでは、想像できないほど巨大な版図をもつ大英帝国から目を背けて、国内の隣人——近くにありながらもよく知らないスラムの住人や辺鄙な田舎の人びと——を知りたいという欲求が生まれる。この欲求を充たすべく、H・V・モートン（H. V. Morton, 1892-1972）やJ・B・プリーストリー（J. B. Priestley, 1894-1984）といったルポ作家は、イギリス中を自動車で駆けめぐり、その土地土地の暮らしを報告した。自動車は使わないにしても、ジョージ・オーウェル（George Orwell, 1903-50）は、北部イングランドの炭鉱町や戦火のカタロニア地方へ一番乗りしては、みずからの体験を赤裸々に語っている。近年では戦間期のモダニズム（あるいは後期モダニズム）と呼ばれる時代、その空気や情緒にかたちを与えるべく誕生した著述実践、すなわちルポルタージュが本論の関心事である。

ルポルタージュとノンフィクション

「流動的なプライベート化」が顕著となる20世紀はじめに世界規模で登場したコミュニケーション・スタイル。そのひとつとしてルポルタージュが生まれた。近年では武田徹のノンフィクション研究に典型のように、ルポルタージュをノンフィクションというジャンルの部分集合として捉える向きがある。しかしながら、ルポルタージュをノンフィクションに含みこんでしまうことで、ふたつ問題が生じてしまう。ひとつにルポルタージュを百花繚乱のノンフィクション文化誕生の前段階に落としこんでしまう弊がある。より酷いケースとして、ルポルタージュの歴史性を無視してしまう。もうひとつの問題（こちらがより厄介なのだが）に、ノンフィクションということばが使われはじめたところからの落とし穴、つまりフィクションかノンフィクションかという分別の議論に足をとられてしまうことにな

る。そもそも「ノンフィクション」とはことばの定義からして、この分別論から逃れられない。手元の『大辞泉』を引くと、「虚構を用いずに事実 に即して作られた作品」と定義されている。つまり「虚構」と「事実」とを二項対立とすることが前提となっているのだ。

21 世紀の今日、この二項対立ほどわたしたちを欺くものはない。「虚構」と「現実」の隠微なあわいという問題に加えて、2010 年代からもうひとつ厄介な事情も加わった。「フェイク・ニュース (fake news)」ということばがドナルド・トランプによって造られ、広められたことだ。『オクスフォード英語辞典』は、この合衆国由来のことばを「虚偽で捏造され、意図的に誤解へと誘導することを目的とした情報を含み、それを流布するニュース。さらに以上のような特徴をもつか、その特徴ゆえに告発されているニュース」と定義している。さらに、この定義には丁寧な解説まで付いており、このタームは 2016 年の合衆国大統領選のあとに広く普及し、以来ふたつの用途で用いられてきたとある。そのふたつのうちひとつは、ソーシャル・メディアやインターネット上で出回っている不正確な物語（とりわけ特定の政治的ないしイデオロギー的な目的に奉仕する物語）を指すときに、もうひとつはメディアの報道が偏っているか、もしくは信用できないと貶すときに使われると言うのである。そしてトランプによる 2016 年 12 月 10 日付けのツイッター投稿（アクセス日は 2019 年 6 月 28 日）を引用している。

わたしが大統領の任務に就いても、パートタイム職になってまで『アプレンティス』をプロデュースしつづけるはずだという @CNN の報道はまるっきりばかげており、嘘である。まさしくフェイク・ニュースだ！³

興味深いのは、『アプレンティス』とはMGM社が制作するリアリティ・

テレビであり、トランプはこの番組に多額の出資をしているばかりか、一時期、みずからホスト（＝裁定者）を演じていた。この番組は参加者を視聴者から募るかたちで「リアリティ」を担保し、参加者たちはビジネス・スキルを競い合う。架空のプロジェクトのもと、参加者たちは販売促進やチャリティ事業、宣伝力・広告戦術でスキルを競い合う。ホスト役のトランプは、参加者たちのパフォーマンス／業績を査定し、もっとも冴えなかった一名に、番組の終わりでクビ宣言（You are fired!）をして、退場させる。こうしたリアリティ・テレビは高い視聴率を獲得するドル箱商品であるものの、出演者の「実能力」や「実生活」と番組編成上の「シナリオ」とのグレーゾーンで成立する問題含みのプログラムでもある。リアリティ・テレビという「不正確な」実人生「物語」で荒稼ぎする人物が、その点を報道されて、この報道は「偏って」いて、「信用できないと貶す」状況はきわめて錯綜している。しかしながら、こうした現象——「おまえは無能だ」「おまえは嘘つきだ」と声高に言う人物が見たいことだけが「事実」になる現象——もまた2010年代後半からの「現実」であることは否定できない。

純粋な認識論者は異を唱えるかもしれないが、いまこの「歴史」のなかで、わたしたちの生存（衣食住）にかかわるさまざまな出来事が起きていることを、わたしたちは知っている。さて、なにが起きているのかという意味を孕む問いに向き合うと、わたしたちは出来事を伝える「語り」に頼らざるをえない。この「語り」の問題を理解するために、過去に起きたなんらかの事件を素材としてフィクションを書く作家の場合を想像してみよう。作家はその事件をより詳しく知るために取材旅行に出かけることもあれば、文献調査を試みることもあろう。たいていの作家は、そこで知りえた「事実」に忠実でいたいという思いを心の片隅に置いていられる。ところが、いざ執筆する段になると、キャラクター作りと時制の処理という別の作業に向き合わざるをえない。扱う事件は過去のもので、事

件が起きたその場所、その時間に、関わった人物がなにを感じ、なにを考え、どう動き出すのか、現在進行形で描写する必要も生まれるだろう。それはふつう「創作」と呼ばれる。

他方、「創作」と呼ばれることをタブー視するノンフィクションの場合はどうか。登山家の角幡唯介は、ノンフィクションの「語り」にもっとも意識的なノンフィクション作家のひとりである。こう述べている。

行為がフィクション化する傾向は・・・行為のほとんどあらゆる局面で発生する。例えば旅の途中でライターが村人と何か言葉を交わす機会があったとする。相手の話す内容に深みや面白みを感じた時、ライターは旅人としてより、むしろ表現者としてその話を作品の中に取り込みたいと考えるだろう。だがそう考えた瞬間に、彼の会話はその意図の影響を少なからず受け、次に自分が口に出す言葉（＝行為）自体が書くこと（＝表現）を前提としたものになり、相手の話をもっと深く聞き出そうとか面白くまとめようとかいう態度に変わってしまう。そして村人との会話がより「書けそうな」面白いものとなった瞬間に、その旅人は心の中で、いい会話ができたことを喜ぶ。つまり表現者としていい仕事ができたと喜ぶわけだ。⁴

先に例に挙げたフィクション作家の取材とは異なり、ノンフィクション作家の取材は未来形である。これから体験することが、材料になる。これは明らかに困難な状況であり、作為性（ヤラセ）と紙一重の関係となる。これからここで突飛な行動に出たら、話は面白くなるだろうという衝動と葛藤しながら、行動せざるをえない。（これは戦中戦後の「私小説」作家の一派が陥ったアポリアと大差ない。）というのも、読者にたいするノンフィクションのアピール・ポイントは、体験者の「誠実さ」であり、その告白が「信頼できる」という点にあるからである。角幡の言う「ノンフィ

クションを成立させる場合の本当の難しさ」とは、書く実践にあって「ノンフィクション性を成立させる」語りにほかならない。これはノンフィクションにかぎらず、ルポルタージュの時代にも強く意識されていた。ウィリアムズが見抜いたように、オーウェルのルポルタージュが成功したのは、アーサー・ブレアが「オーウェル」というペンネームを使って纏ったペルソナがあったからであり、「オーウェル」というヴァーチャルな語り手の語りが信頼されたからにほかならない。

「虚構」も「事実」も「語り」の形式に依存している点で、わたしたちが思っているほどの差異はないのだ。ただ、大急ぎでつけ加えなければならないが、この形式は歴史とともに変わる。歴史に名を刻んだ多くのルポルタージュ作家たちは、そのことをじゅうぶん意識したうえで執筆を行っている。形式を注視することで、ルポルタージュを歴史化しなければならないまい。

ノンフィクションの誕生

「ノンフィクション」という比較的新しいジャンルの成り立ちをもう少し詳しく見る必要がある。念のためにもう一度、辞書の定義を確認しておきたい。『新明解国語辞典』（第5版）にはこうある。「記録文学・紀行文・体験記など、つくり話・小説でないもの」。『スーパー大辞林』での定義も似たり寄ったりである。「虚構によらず事実に基づく伝記・記録文学などの散文作品、または記録映画など」。元祖の英語で「ノンフィクション (nonfiction)」という単語が使われはじめるのは、19世紀も後半になってからである。『オクスフォード英語辞典』をひもとくと、こう定義されている。「歴史書、伝記、参考書など、フィクション以外の散文。特に事実に基づく出来事を語りによって記述したもの、もしくは、こうした記述からなるジャンルを指す」。要するに、ノンフィクションは、フィクションとは対抗的に定義されており、そのメディアも映画まで緩く規定されて

いる。

そのはず、ノンフィクションはルポルタージュよりもはるかにジャーナリズムとの親和性が高い。武田徹の『日本ノンフィクション史』では、その点を意識して、「ノンフィクションの成立とはジャーナリズムが単独で成立するひとつの作品としての骨格を備えたこと、その骨格を形成するものとして出来事の発生から帰結までを示す物語の文体を持ったことだ」と述べられている。⁵「ジャーナリズムが単独で成立する」骨格（もしくは形式）をもったのは比較的最近のことである。そのため武田は、ノンフィクションとは「せいぜい 1970 年代にまでしか遡れない概念」だとしている。⁶日本のノンフィクションが 1970 年代という高度経済成長期の文化産業と密接に関係していたとする著者の主張は明快である。著者はジャーナリズムの特徴について、「商品性をジャーナリズムが強く持つのと同時に求められたとみなされた中立公正性であったが、それがあたかもジャーナリズムの理想として、商品性云々と切り離されて謳われるようになる」と述べるが、的確な指摘である。⁷武田が指摘しているように、この時期にルポルタージュはノンフィクションに「再配置」された。そうであるならば、「再配置」以前のルポルタージュの実践とはいかなるものであったのか。わたしの最大の関心はそこにある。さらにだが、ルポルタージュの原義はフランス語由来であり、その実践が 20 世紀の初頭、アンドレ・ジッドの紀行文にはじまり、ヨーロッパの諸メトロポリスはもちろん日本の大都市での製作・出版活動に展開したことを忘れてはいけない。ルポルタージュというジャンルは世界規模のモダニズム運動のなかから誕生し、その後ポストモダンの時代を迎えて衰退していった。

しかしそのプロセスを見る前に、まずはルポルタージュ、その後にノンフィクションが生まれたその条件についてふれておかねばなるまい。このような文化形式が産業革命以前にはありえなかったことからして、大雑把にいうと双方とも産業化、モダン化への反応と捉えることはできるだろ

う。ノンフィクションの主要なジャンルに、登山をはじめとする冒険談がある。武田徹はこの点を指摘するにあたり、登山家、角幡唯介のことも挙げています。角幡は「山登り」という行為について、次のように直截に述べています。

山登りというのは都会人の遊びだ。農山村や漁村など生活が自然と密接に結びついている土地では登山という遊びは生まれない。登山はあくまで都市生活者が生活から失われた自然を回復させるために行う贅沢な遊びであり、梅棹さんもその点は明確に指摘している。⁸

ここで角幡が言及している著述家は梅棹忠夫で、梅棹自身も「古典的な大都会」、京都に生まれ育ったため、自然と登山に興味をもったと述懐し、「だいたい信州の人は山へ行かない。今はだいぶ行っていますけれど、多くは京都の人です。京都から登山の開拓者、登山家が非常にたくさん出ましたが、その理由の一つは、やはり京都が古典的に大都会であるということですね」と言う。⁹「登山というのは必ず大都市で始まる」という信条を角幡も梅棹も共有しているが、これはモダン化への一反応にほかならない。モダン性の特徴が、階級分裂や田舎と都会との分断、アートとネイチャーの区別、週日と週末の差異化などにあるとするならば、登山は「都市生活者が生活から失われた自然を回復させるために行う贅沢な遊び」にはかならず、そういう活動としてモダン性の二分法を維持・再生産してきた。ノンフィクションは現代の文化産業との親和性が高い理由は、これで明らかだろう。既知の（したがって分かりやすい）二分法的発想（イデオロギーと言ってもいい）を再生産するレジャー用品にいつでもなれるからである。

ルポルタージュというコミュニケーション・スタイル

他方、モダニズムが産み落としたルポルタージュはどうだろうか。20世紀前半、帝国主義は爛熟期を迎え、ベルリン会議でアフリカ大陸は列強国で分割領有され、世界地図に空白地帯はなくなった。ロシア革命、ファシズムの台頭を経て、国際情勢も錯綜し、移民や亡命は当然のことながら、経済活動においても人びとの移動の範囲は広がり、その頻度も増した。そんななか、モダニズムという政治・文化刷新運動は世界の諸メトロポリスで起きた。ウィリアムズはモダニズムがメトロポリスに誕生した理由を、モダン性への反応とは別の視点から分析している。

モダニズムと正確に呼ばれる動きが生まれたのは、都市やモダン性への反応という大きなテーマがあったからではない。むしろ、メトロポリスというつねに変わっていく文化環境の動向を芸術家や知識人が感じ取りながら、彼らがどこに身を置くのか、その新しく個別的な位置取り（ロケーション）こそが、モダニズムを生み出したのだ。¹⁰

移動が不可避の現代社会にあって、バックグラウンドが違う者同士がコミュニケーションを取るには、融通無碍なコミュニケーション・スタイルが必要とされた。あるいは、ウィリアムズ流に言い換えると、「知りうる (knowable)」関係であるにもかかわらず、いまだ知るにいたっていない相手を知るアクセスが必要となった。モダニズムはコミュニケーション様式の探求でもあった。そこで、ウィリアムズの『キーワード集』(*Keywords*, 1976) で「コミュニケーション」を引いてみたい。¹¹ この語彙集では各キーワードの語義の歴史的変化が示されているが、古フランス語やラテン語において、「コミュニケーション」は元来、アクション（行為）を指したという前置きの上、20世紀にこれが「メディア」と同一視される以前には、道路や運河、鉄道などの交通・流通の機能を意味してい

たと記される。

どうやらこの記述に、「コミュニケーション」という抽象語にたいするウィリアムズの原初的イメージが隠されているようだ。『文化と社会』(Culture and Society, 1958) ほか一連の著作の執筆と並行して、ウィリアムズは半自叙伝小説『辺境』(Border Country, 1960) を書いていた。主人公は辺境にある労働者共同体を出て、都会で社会学を教える大学講師となっている。その彼が父危篤の報を受けて、帰郷する物語なのだが、「コミュニケーション」が重要なモチーフになっている。知的エリートの視座それに都会のマナーやことば遣いを身につけた主人公は、郷里の人びととうまくコミュニケーションが取れなくなっている。焦燥感を募らせるうちに、忘れかけていた「コミュニケーション」に彼が気づく決定的な契機が訪れる。主人公は父の仕事場であった信号所に、もう使うこともないコップなど身の回り品を受け取りに行き、そこで会った父の同僚からひょんなことを聞く。「信号手のほんとの仲間ってのはよ。同じ信号所の人間じゃないんだ。そりゃうまく行っちゃいるよ、しかし同じ信号士同士は毎日ちょっと顔をあわせるだけだからな。ほんとの仲間は両隣の信号所の人間なんだ。親爺さんだってそうさ、両隣とは何年もいっしょにやってきたんだからな。」¹² 顔は知らないが、毎日業務上、長時間無線でやりとりをする関係、会ったこともないのに個人的な悩みを語り合う関係。そうした関係の形成＝アクションにウィリアムズは「コミュニケーション」の原形を見ていたのかもしれない。

ジッドのコンゴ紀行にはじまり、ジョージ・オーウェルのスラム体験談、徳永直の満洲見聞録まで、ルポルタージュとは匿名性を許さない書き物であった。「匿名性を許さない」とは、観察し記録している「わたし」と「知りうる」相手との関係を包み隠さず語ることにほかならない。だからこそルポルタージュの書き手はみな、対象とみずからとの距離をつねに意識しながら、「書く」という実践をつづけたのだ。そのことを考える

と、ルポルタージュをモダニストたちの仕事のなかに位置付けることの重要性は明らか増してくる。

石牟礼道子がいた時代

日本のモダニズムに目を移せば、石牟礼道子のルポルタージュが俄然、重要になってくる。石牟礼自身、みずからの著述実践を「聞き書き」や「ルポ」と呼ぶことはあったが、「ノンフィクション」と意識したことはなかったように思われる。だから1970年代以降のノンフィクション隆盛期のことを考えると、石牟礼は歴史上の分水嶺に位置する象徴的な存在でもある。有名な話だが、石牟礼は大宅壮一の仕事を記念して作られた第1回「ノンフィクション賞」に選ばれたものの、受賞を辞退している。1970年の出来事である。この出来事は武田の『日本フィクション史』に詳述されているが、この賞はノンフィクション分野における「芥川賞・直木賞」を目指す目的で創設され、選考対象は「ルポルタージュ・内幕もの・旅行記・伝記・戦記・ドキュメンタリー等のいずれかに包括されるノンフィクション作品全般」となっていた。¹³ この趣旨からも明らかなように、ノンフィクション賞とはそもそも「〇〇以外のもの」の促進として発想されており、既存商品（芥川賞・直木賞）以外の書き物の市場拡大が企図されていた。それと同時に新進の作家の発掘も、もくろまれていた。

石牟礼の辞退理由はさまざまに推測されてきた。東京のジャーナリズムへの反感、「サークル村」系の左派としての気概、水俣病被害者への配慮など、おそらくはどれも当たっていると思われる。ただ、辞退に寄せたメッセージにある次のことばは意味深長である。「私が一人でいただく賞ではありません。水俣病で死んでいった人々や今なおし苦しんでいる患者がいたからこそ書くことができたのです」。¹⁴ 「ルポルタージュ」とは語り手（石牟礼の場合、語り部）と語られる対象との関係を記述した書き物であり、書き手は心のどこかに「合作・共作」という意識をもっていた。

石牟礼が「一人でいただく賞ではない」というとき、それは一作家の謙遜などではなく、ルポルタージュという形式の本質を言い当てている。

ルポルタージュを書くこと、それは石牟礼にとって「加勢^{かせ}する」行為にほかならなかった。生前、石牟礼がよく口にしていたと言われる「加勢する」とは、どんな行為を意味していたのだろうか。晩年の石牟礼は水俣病患者救済闘争をつづけるなか、患者のひとり、杉本英子が口にした「私はもう。許します。チッソも許す」ということばをよく引用した。石牟礼と親交があった米本浩二は、『読書人』に寄せた追悼文のなかで、彼女の立ち位置を次のように説明している。

しかし、石牟礼さんは、患者さんの「許す」という言葉を紹介しながらも、みずから「許す」と言うことは決してなかった。「許す」というのは水俣病患者だから言えることであって、「加勢」しているに過ぎない自分が自分の言葉として言えるはずがない、そういう厳しい自覚があった。¹⁵

みずからは当事者にはなりえない。だけれども当事者の「許す」という重たい発言に寄り添い「悶ゆる」こと、ひいてはその「悶えた」経験を余すところなく書き込むことに、石牟礼のルポ作家としての矜持があったと言えるだろう。

弱い人を見るとどうしても「悶ゆる」人になってしまう石牟礼の天来の性分はつとに指摘されてきた。それでも「悶え神」と形容される性分は彼女が紡ぐ「ことば」でしか表現されえないものだし、読者もそれをおしてのみ感じるものである。「悶え」とは自我を他者に寄り添わせるうち自他の区別がなくなる共感応であると定義し、それが「ことば」のレベルでどう描出されているのか、彼女の処女作『タデ子の記』（1946）を例に見てみたい。

『タデ子の記』は一人称単数「私」語りの体験記である。代用教師の「私」は偶然、通勤汽車のなかで「かんじん」（「勸進」由来の方言で、乞食のこと）のような格好の戦災孤児に出会い、見るに見かねて自宅で面倒を見る。語り手である「私」は、タデ子のような孤児を多く捨てることの「もったいなさ」を嘆き、孤児に「一体、何の罪があるのでしょうか」と憤ってみせる。¹⁶ そこまではよくある語りなのだが、石牟礼の語りは庇護者の立場を逸脱し、「悶え」はじめる。次の箇所は、姉を頼って関西に戻ると言いだしたタデ子の行末を案じる「私」の内的告白である。

本当にその八家へ辿りつけばいいが・・・また辿りついたにしても、果して今も、その姉さんが・・・等考えていくとき、エエッ先はどうだろうと私もこの子を連れていきつく所まで行って見ようかと思ったり・・・自分一人もよほどでなければ生きのびられそうにない今の世で、人の世話など出来るものか、本当はそうあらねばならぬのであろうが・・・。

タデ子も人、我も人、だのに何故、タデ子は放り出されねばならぬのか。それでいいのでございましょうか。私は、お金が、モノが沢山たくさん欲しいと思いました。そして私自身のもっともっと強い強い力を欲しいと思いました。¹⁷

ここには興味深い語りの転調がある。タデ子の庇護者として社会を糾弾していた「私」もまた、「もったいない」と思いつつもこの孤児を「放り出」す張本人だと悟るのだ。そして、そうせざるをえないみずからの弱さに身悶える。こうして人として「あるべき私」と「いまある私」とのあいだで引き裂かれている状況をタデ子の状況にさりげなく溶け合わせている。

「悶ゆる」とは身体的な反応である。頭で考える以前の反応にほかなら

ない。作中、「私」はタデ子が無償で診察してくれた医師に、横文字「ヒューマニズム」の意味を尋ねる。医師は「私」がタデ子の面倒を見ていることこそ「ヒューマニズム」だと説明したのち、こう洩らす。「ヒューマニズムだなんだ、と殊更らしく、となえなければならない今の世の中は悲しい限りですなァ」。¹⁸ 西洋由来の観念「ヒューマニズム」など必要ない社会がかつてはあったと言いたいのだろうか。たしかに「私」は頭で考える以前に「悶え」、あと先考えず「加勢」する己れを語っている。石牟礼の語りは、島と海とそこで生かされている生き物たちすべてに共感しつづけたという意味で、「ヒューマニズム」とは無縁だったのかもしれない。

繰り返しになるが、ルポルタージュとは匿名性を許さない書き物である。「匿名性を許さない」とは、観察し記録している「わたし」と「知りうる」相手との関係を包み隠さず語ることにほかならない。その語り口は、関係が変われば当然変わるものであり、関係の数だけ語り口があった。その意味で、1970年代以降に文化産業が成熟するなかで使われるようになったフォーマットやフォーミュラからは自由だったと言えるだろう。ルポルタージュはどれも、こうした関係形成（＝コミュニケーション）の痕跡なのである。

注

¹ Raymond Williams, *Television: Technology and Cultural Form* (London: Routledge, 2003), 19. レイモンド・ウィリアムズ『テレビジョン—テクノロジーと文化の形成』、木村茂雄・山田雄三共訳（ミネルヴァ書房、2020）、27.

² Raymond Williams, *Orwell* (Fontana, 1971), 88-89. レイモンド・ウィリアムズ『オーウェル』、秦邦生訳（月曜社、2020）、107-109.

³ *The Oxford English Dictionary Online*, accessed on August 22, 2023.

⁴ 角幡唯介『探検家の憂鬱』（文藝春秋、2015）、55.

⁵ 武田徹『日本ノンフィクション史—ルポルタージュからアカデミック・ジャーナリズムまで』（中央公論社、2017）、xviii-xix.

⁶ 『日本ノンフィクション史—ルポルタージュからアカデミック・ジャーナリズムまで』、xvi.

- ⁷ 『日本ノンフィクション史—ルポルタージュからアカデミック・ジャーナリズムまで』, 61.
- ⁸ 角幡唯介『旅人の表現術』（集英社, 2020）, 259.
- ⁹ 梅棹忠夫『山をたのしむ』（山と溪谷社, 2015）, 140.
- ¹⁰ Raymond Williams, 'The Emergence of Modernism' in *The Politics of Modernism* (Verso, 1989), 44. レイモンド・ウィリアムズ『モダニズムの政治学—新順応主義者たちへの反抗』, 加藤洋介訳（九州大学出版, 2010）, 21 頁を参照.
- ¹¹ Raymond Williams, *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society* (London: Fontana, 1976), 72. レイモンド・ウィリアムズ『完訳キーワード辞典』, 椎名美智, 武田ちあき, 越智博美, 松井優子訳（平凡社, 2011）, 68-69.
- ¹² Raymond Williams, *Border Country* (Hogarth Press, 1988), 142-43. レイモンド・ウィリアムズ『辺境』, 小野寺健訳（講談社, 1972）, 144-145.
- ¹³ 『日本ノンフィクション史—ルポルタージュからアカデミック・ジャーナリズムまで』, 182.
- ¹⁴ 『日本ノンフィクション史—ルポルタージュからアカデミック・ジャーナリズムまで』, 181.
- ¹⁵ 米本浩二「石牟礼さんの加勢」、読書人誌面掲載特集「追悼 石牟礼道子 第三回」、『読書人』第 3233 号（2018 年 3 月 30 日）.
- ¹⁶ 石牟礼道子『タデ子の記録』, 『石牟礼道子全集 不知火』, 第 1 巻 初期作品集（藤原書店, 2004）, 12.
- ¹⁷ 『タデ子の記録』, 23-24.
- ¹⁸ 『タデ子の記録』, 17.